

## あしよろ・ハードサポート通信

今年は過去に例を見ない猛暑が続き、乳牛へは多大な暑熱ストレスがかかっていたことと思われます。今後は暑い時期に乾乳期間を過ごした乳牛の分娩後の立ち上がり心配なところですが、今回は周産期トラブルと子宮炎、および分娩後の処置について取り上げてみたいと思います。

### ◆ 改めて、周産期のトラブルについて

周産期トラブルには低カルシウム血症やケトーシス、第四胃変位、胎盤停滞などがあり、特に3産目以上の分娩後の乳牛では周産期トラブル発生リスクが高まります。初産牛と2産目の乳牛では低カルシウム血症やケトーシスの発症は少ない傾向にありますが、産後のストレスによる第四胃変位や、難産が原因での胎盤停滞は産次を問わずに発生する可能性があり、特に胎盤停滞は分娩後の子宮炎発生リスクが高まります。



重度のケトーシスを発症した乳牛

### ◆ 見過ごせない子宮炎の存在

環境の衛生度にもよりますが、分娩後は胎盤が体外に排出される際に、その胎盤を経由して子宮内での細菌感染が起こりやすくなります。その後炎症が発生すると子宮炎となり、さらに進行すると子宮内膜炎になってしまいます。分娩後の子宮炎や子宮内膜炎の罹患率は意外と高く、ある文献では分娩後の乳牛において約40%が子宮炎、約20%が子宮内膜炎を発症しているとの報告があります。分娩後2週間以上経過しても白濁あるいは赤褐色の悪臭を放つ悪露おろが外陰部から出てくる場合は子宮内での炎症が長引いている可能性があり、該当牛は採食量が十分に上がってこないことが予想されます。また分娩後に子宮炎に罹患した乳牛は子宮の回復が遅れ、その後の繁殖面に悪影響が出ることも考えられます。



### ◆ 現場でできる分娩後の処置

周産期トラブル予防のための一般的な方法として、カルシウム皮下注射、プロピレングリコールの給与は現場でもよく行われています。それらに加えて、子宮炎を予防する観点から以下の処置を最近では現場でおすすめしています。あくまで一例ですので、抗生剤や消炎剤の使用は獣医さんとよく相談の上ご検討ください。

| 処置内容           | 初産・2産 | 3産以上 | 期待される効果         |
|----------------|-------|------|-----------------|
| オキシトシン注射（搾乳前）  | ○     | ○    | 胎盤排出促進          |
| アンピシリン（抗生剤）注射  | ○     | ○    | 子宮炎、子宮蓄膿症の予防    |
| ジクロフェナク（消炎剤）投与 | ○     | ○    | 分娩時疼痛、発熱の緩和     |
| カルシウム皮下注射      | -     | ○    | 低Ca血症の予防、胎盤排出促進 |
| プロピレングリコール給与   | -     | ○    | ケトーシスの予防        |

※必ず獣医師と相談する

### ◆ 分娩後の処置が生み出すメリット

右の図は2018年と2019年それぞれ1年間における、ある牧場での周産期トラブル発生状況を示しています。少し古いデータになりますが、この牧場では元々周産期トラブルが多発していました。改善を行うために2018年途中から後継者の息子さんに周産期管理を担当してもらい、2019年1月からは分娩後全頭に前述の分娩後処置をフルコースで行ってもらいました。2018年と比べて2019年は3産目以上の分娩割合が多いにもかかわらず、廃用率や各疾病の発生率も減少しています。このように良好な結果が出た背景には、分娩後すべての牛に対して処置を行ったこともそうですが、すべての牛を良く観察することにつながったのも大きいのではないかと思います。

|              | 2018年 | 2019年 |
|--------------|-------|-------|
| 総分娩頭数        | 63    | 67    |
| うち3産以上の割合    | 41.3% | 44.8% |
| 周産期トラブルでの廃用率 | 6.3%  | 1.5%  |
| 低カルシウム血症発生率  | 11.1% | 1.5%  |
| 第四胃変位発生率     | 6.3%  | 4.5%  |
| ケトーシス発生率     | 11.1% | 6.0%  |
| 後産停滞発生率      | 14.3% | 11.9% |

※2019年1月より分娩後全頭へ抗生剤と消炎剤投与

### ◆ 分娩後のスタートダッシュのために

最近では子宮炎などの体内の炎症そのものが乾物摂取量と乳量の低下を引き起こすことがわかってきています。通常の周産期トラブルと異なり、子宮炎は目に見えにくい部分の疾病です。泌乳期の良好な立ち上がりのためにも、すべての周産期疾病の症状が出る前の「予防」として、分娩後の処置をおすすめします。

（市川雷太）

